

## (2) IH-3 出土の石棒について

出土状況 (図Ⅵ-12~14、口絵 5-4・5、図版23・24)

IH-3 は火山灰 (Ko-g) と攪乱層を除去した段階で浅いくぼみとして確認できた。遺構の上部は伐採工事の際と思われる削平を受けている。覆土には多量の炭化物、焼土、硬化した土壌が見られ、床面の一部に炭化材の拡がりが見られる焼失住居であった。床はⅥ層の黄褐色ロームに掘り込まれており、石棒の破片は床面直上の黒褐色土からまとまって出土した。接合作業の結果、住居の南側の壁付近に散布されていることがわかった。蛇紋岩の玉とイシイルカの頭骨片は、石棒片のまとまりより下位から出土した。斜面の崩落により、床面が斜めに崩れかけた位置からの出土であるが、出土状況から、元の位置からさほど動いてはいないものと判断できる。

出土遺物 (図Ⅵ-15~18、口絵 6-2、図版38~40)

石棒は、土壌水洗で出土したものも含め破片131点である。このうち121点が接合した。円柱状を呈し、長さは49.9cm、最大幅は端部にあり8.8cm、重量は3,620g である。石材は凝灰岩で、一部に原石面を残すが、全面研磨による整形が施されている。図で上に表現した端部は浅い溝状にくぼんでいるが、もう一方は平坦である。破片は部位ごとに、被熱し赤色を呈するもの、炭化物が付着し黒色を呈するもの、ほとんど被熱していないものがあることから、破片の状態で住居内に散布され、住居の焼失時に被熱したものと考えられる。接合資料の綿密な観察により推定すると、長さ三分の一程の部分で二分割し、それぞれ板状の破片に割られたものである。

玉は半分欠損している。直径は2.6cm。全面研磨されており、両側から穿孔されている。断面の観察から意図的に割られた可能性が高い。蛇紋岩製である。

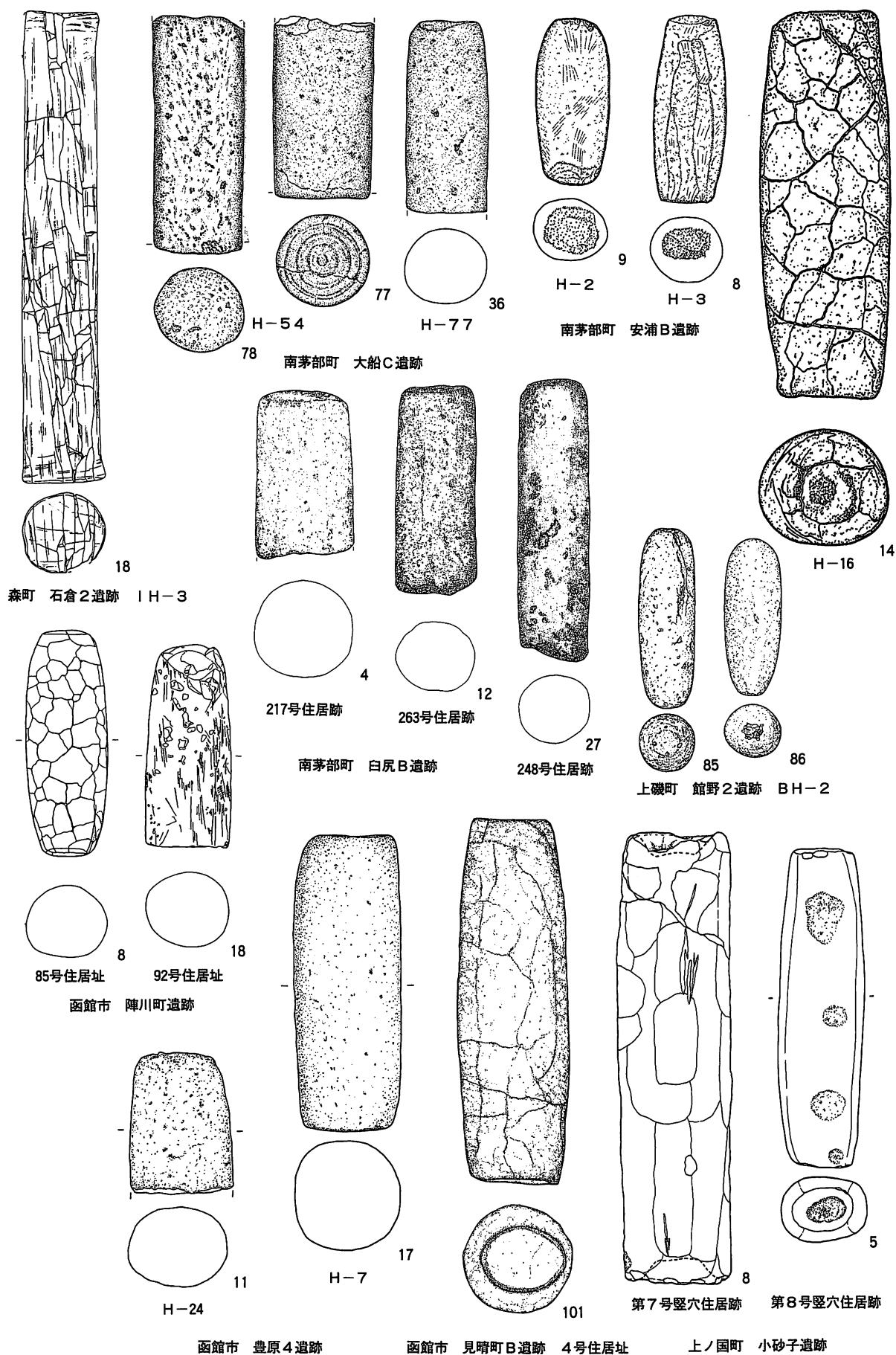
石棒と玉と伴に出土した焼骨片は、ほとんどが細かい破片での出土で、全量45.7g である。種の同定は東京国立博物館客員研究員 金子浩昌氏に依頼した。部位はイシイルカ (リクゼンイルカ) の頭部で、左右の後頭顆、胸椎体、頭骨片で1個体であった。

石棒の出土例 (図Ⅵ-5)

図Ⅳ-5 は、道南地方の榎林式の住居から出土した石棒の主なものを集成した。縮尺は六分の一に統一してある。円柱状のものと中央部が膨らむものがあり、端部がくぼむものが多い。円柱状のものは南茅部町大船C遺跡や臼尻B遺跡に多く見られる。明らかに被熱したものは、南茅部町安浦B遺跡H-16や函館市陣川町85号住居址、上磯町館野2遺跡BH-2の例がある。3つに分割されて出土した例は上ノ国町小砂子遺跡第7号竪穴住居跡のものがある。この住居跡からは、覆土の上層からではあるが、トドの右上腕骨が出土している。

縄文時代中期以降に増加する焼失住居は、住居廃用時の儀礼的行為の一つと考えられている。焼失住居から石棒が出土する例は、南茅部町安浦B遺跡のH-2や函館市豊原4遺跡H-27などに見られる。また、焼失住居の記述はないが、覆土に多量の炭化物、焼土粒を含む住居からの出土例を含めると相当数にのぼる。これらの例から、石棒は住居廃用時の儀礼的行為の一要素であると考えられるが、石倉2遺跡IH-3出土例のように、細かく破碎し、床面に散布する例は、管見の限り見られない。石倉2遺跡の出土例は特殊なものか、また、廃用時以前の住居内あるいは集落内での石棒の使われ方など、今後さらに検討してゆきたい。

(村田 大)



図VI-5 縄文時代中期後半の石棒